The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	本會記事
Author(s)	
Citation	懐徳. 1930, 8, p. 87-89
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88822
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

本堂記事

△記念祭典並新奉祀者祭典　昭和四年十月十二日記念祭典並物故諸先生、功勞者新奉祀祭典を執行、文學博士武内義雄先生の「易傳の道德思想」、文學博士宇野哲人先生の「孔子の宗教觀」と題する記念講演あり。

新奉祀者　文學博士松山直藏教授、同藤代禎輔、同深田康算、同坂口昂、文學士稻束猛各講師、波多野七藏教師、永田仁助前理事長

△理事新任　昭和四年十月十二日評議員野々村政也氏理事に就任。

△臨時講演　二月十五日に佐々木恒清先生の「奈良時代の美術」と題する講演、五月五日に宮中顧問官井上通泰先生の「我等の祖先の思想」と題する講演あり、（共に本誌に收載す）

△田中理事　理事田中隆三氏三月五日辭任。

△野々村理事　四月二十四日東區十二軒町の自邸に於て逝去す

△鈴木博士　昨年七月より歐洲各國を視察中なりし文學博士鈴木豹軒先生は一月二十六日歸朝せられ、四月十一日より擔當の白樂天詩を續講せらる。

△第三期の講義講演　昭和五年第三期（九月）より新に開講するもの左の如し

定日講義　木曜　枕草子

定期講演
- 農村振興と青年の教化　京大教授農學博士　橋本傳左衛門先生
- 支那都市發達史概論　京大助教授文學士　那波利貞先生

通俗講演
- 憲法の話　京大教授法學博士　佐々木惣一先生

本會記事

昭和四年十月十二日　記念祭典あり、會員一同雜務を擔當する、當日會誌を刊行する、

十月十三日　午前九時財津吉田兩先生を初め會員十四名集合、故西村先生の墓地を清掃し榊を手向け

る、○午後七時より武内先生歡迎の茶話會を開く、

十月二十二日　午後七時より本會主催講演會を開く、今井先生の神宮式年遷宮祭奉仕謹話、小倉先生の排日に就ての御講話あり、聽講者七十餘名、盛會であつた、

十一月六日　財津吉田兩先生、幹事四名會合協議

十一月二十九日　本堂理事田中先生が文部大臣になられる、平素より文敎に深き御造詣あるを思ひて邦家のため慶賀に堪へぬ、祝意を表し奉る、

十二月五日　阿部野新齋場にて故西村碩園先生夫人西村幸子殿の葬儀あり、會員十數名會葬する、

十二月八日　午後一時會員四十名大阪工廠本部に集合、廠長三輪中將より工廠の現狀及その沿革に就て說明あり、木工車輛自動車タンク飛行機射擊砲大砲砲彈の作業を見學し、四時三十分辭去する、繁忙の時間を割愛して、親しく案內の勞を執られた同中將の厚意を感謝する、

十二月十七日　午後五時三十分本町橋東詰あみ清にて忘年會を開催する、財津吉田兩先生及會員十數名集合兩先生の勞を慰し奉り、將來の希望を語る、十時散會、

昭和五年二月一日　長柄葬儀場にて會員阪田廣吉君の葬儀あり、會員數名會葬する、

二月十六日　午後三時より總會を開く、出席者三十名、小沼幹事開會の辭を述べ、山本幹事事業と會計とを報告し、幹事改選は會長の指名を乞ふことに決議、會長より小沼、太田、岡田、酒井、貝田、山本の六名を指名される、終りて鈴木豹軒先生の歐洲視察談を拜聽、五時より席を本町橋詰かき春に移し、御歸朝歡迎の小宴を催す、成田先生出席せらるゝもありて、鈴木先生を中心に歡談盡くる所を知らず、九時散會、

二月十九日　會報發送

三月十二日　財津先生及幹事五名會合、本年度事業計畫を決定する、

五月四日　探勝會を催す、午前八時三十分吉田先

生を初め會員十七名京阪電車天滿橋停留所に集合、宇治川ラインを周遊す、初夏の山水を心ゆくばかり觀賞し、黃檗にて普茶料理を味ひ午後八時解散した

八月七日　財津吉田兩先生及幹事五名集合、會誌刊行に就て協議、

八月十三日　本堂理事長小倉先生、住友總理事の重職に就かせらる、先生の高潔溫厚なる人格が、大阪財界の向上發展に資するところ甚大なるべきを思ひ、謹みて慶賀の意を表し奉る、

八月二十六日　午後六時三十分より百花村にて東京へ轉居せらるゝ會員三輪中將の送別會を催す、出席者十七名、財津先生の送別の辭、三輪中將の謝辭あり、また會員今川せい君傳道の目的を以て渡支さると聞き招待せしところ出席さる、よつて山本幹事たちて今川君を激勵するの辭を述べ、今川君の答辭あり、今西君の講釋一席、吉田先生の惜別の詩朗吟三輪中將の臺灣視察旅行の詩の披露などありて興趣盡きず、別席にて會議尙數刻、九時三十分閉會する

編輯を終へて

山本楢信

三日見ぬ間の櫻花、いつしか若葉靑葉の夏を迎へ、また變じて紅の錦を織る、世相變轉の急激なる、またこれに過ぎたるありて、進化に遲れざらんと人は馬車馬のやうにかけまはり、いつしか人間本來の面目さへ忘果てゝ、機械のために貨幣のために奴隸となり了るのとき、忙中閑をつくり、聖經賢傳を繙きて、修身治國平天下の深奧の道を尋ね日常平素體驗するところを省察して、向上の一路を辿るの友集ひて、ここに一百名、溫厚篤學なる會長財津先生の德望を慕ひ、諸先生の懇切なる指導を受けて、身心の鍛練に怠るのひまなきぞめでたき、まづ本會の自讃はこれ位にて遠慮仕る。

由來本會には名物男が多いといふ噂を聞いてゐる、藤塚、酒井の兩君の如き、その一人かも知れぬ、激務の餘暇灼熱の酷暑もものかは、材料を蒐集する、